

# 英雄王と劣等生

がんきやりあー

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

英雄王ことギルガメツシュが達也と深雪と共に暮らしていく物語？です

# 目次

追憶編								
追憶編	# 1							1
追憶編	# 2							7
追憶編	# 3							14
追憶編	# 4							20
追憶編	# 5							26
追憶編	# 6							33
入学編								
入学編	# 1							51
入学編	# 2							61



## 追憶編

## 追憶編

## # 1

こんにちは。私の名前は司波深雪です。今、私は夏休みを利用した家族旅行で沖縄に向かっています。家族旅行といってもプライベートじゃないケースがほとんどなのでガラにも無くウキウキしているのですが……問題が二つあります。一つ目は兄が一緒という事です。私は別に兄のことは嫌いではない。だけど苦手だ。正直一つ目のことはどうでもいい。問題なのは二つ目です。その二つ目ですが……後ろの三人座りのシートを独り占めしてまるで我が物のように座っている金髪の青年……英雄王？さんがついて来ていることです。私はこの人が嫌いだ。嫌いなんです。彼は私のガーディアンの一人なんです。初対面の時私に向かって、「我の名を知らぬこの雑種の護衛をしろと？」といきなりバカにされ、いや悪口を吐かれました……当然私は悪口を言われたため怒ったのですが「嫌いぞ雑種、身の程をわきまえぬか！」身の程をわきまえるのはどっちなんでしょうか…… 私は言い返そうとしましたが彼からの殺気が凄かったので言い返せませんでした……

今では雑種と呼ばなくなりましたがそれでも私は彼のことは大っ嫌いです！

\*

飛行機から降りて別荘へ向かい別荘に着き

「いらつしやいませ、奥様。英雄王さま。深雪さんも達也君も良く来たわね。」

と出迎えてくれたのは桜井穂波さんだった。

「さあ、どうぞお入りください。麦茶も冷やしておりますよ。それともお茶を淹れましょうか？」

「せっかくだから麦茶をいただくわ」

とお母様が言い

「畏まりました。深雪さんと達也君も麦茶でよろしいですか？」

「はい、ありがとうございます」

「お手数をおかけします」

と私と兄が言い

「王様はいかがなさいますか？」

「我には最高の酒をだせ、くだらない酒を出そうものならこの家ごと吹き飛ばすぞ！」

「ええつと…」

桜井さんが困惑してる…

「冗談だ、英雄王ジョーク、大いに笑うがよいフハハハ！」

「アハハハハ…」

桜井さん、ご愁傷様です。

\*\*\*

「お母様、少し歩いてきます」

別荘に閉じこもっているのは勿体無い気がしたので、散歩に行くことにした。

「深雪さん、達也と王様を連れてお行きなさい」

「…わかりました」

兄はともかく彼も連れていかなければならないなんて、せつかくのお散歩が台無しになったが余計な心配はかけたくなかったため渋々了承した。

私は兄と彼を連れて海岸を歩いていた。意外にも彼と兄の関係は良い、私よりも。そのためか達也と話しながら彼はついて来ている。

(何故私と兄の対応がこうも違うのでしょうか…) そう思っていると前から来た人とぶつかってしまった。今のは私が悪いのだが、2回目は向こうからぶつかってきたのだ、しかし相手は大男だった。反射的な怒りが恐怖に取って代われたが、視界が兄の背中に塞がれると何故か安心感があつた。

「ああ？ガキに用はないぜ？」

「ハッ、チキン野郎がカツコつけてんじゃねーよ！」

と見下していた。

ちなみに彼はこんな状態でもただ観ていた。

「わびを求めるつもりは無い。来た道を引き返せ。それがお互いの為だ」

「なんだと？」

「聞こえていたはずだが？」

「テメエ！大人を舐めんじゃねえ！」

と直後男が兄に殴りかかろうとしたら男の顔スレスレに剣が飛ばされていた。…剣？何故剣が飛ばされていたのだろうか？

「雑種如きが。我が臣下に手を出そうものなら死罪に値するが我が寛大な心をもってし今すぐ立ち去ることで命は保証しよう」

と彼がこちらに近寄ってきた。もしかして彼が剣を飛ばしたの？それならば一体どこから剣を出したのだろうか？

「あ？なんだ？テメエは？」

「我は王の中の王。雑種如きに名乗る程安い名等ではないわ！」

… 相変わらず堂々としていて相手を見下していますね。

「なんだとお！」



と彼を殴ろうとすると突然男の体全体に鎖が巻かれた。

「なんだ！これは！」

男は驚いているが実は私もかなり驚いている。彼が魔法を使っている所などみたとが無い。それに加えて彼はCADは持っていないからどうやって発動しているのが全くわからない。

「……しかし兄はなぜそこまで驚いていないのだろうか？」

「呆れた男よ、自分自身の実力を知らず、我が臣下だけでなく我に手を出そうとは、死をもつて償え」

と彼は後ろから剣を出現させてそれを手に取り男を斬ろうとするが

「やめておけ、王よ」

そう言ったのは兄だ。

「ここで人を殺せば問題になる。」

「……そうか、運がよかったな雑種。達也がいなければ今頃死んでいただろうな。」

と男に巻かれていた鎖が消滅した。

「黙って失せよ、雑種が」

「……」

彼の言葉通り男達は黙ってその場を立ち去った。

「深雪さん、何かあったんですか？」

別荘に戻ってきたら桜井さんが私に話しかけてきた

「ちよつと……男の人に絡まれてしまつて」

「まあ……それでその男は？」

「それは、兄と、かr……王様が追い払つてくれました。」

と言うと桜井さんは彼の元へ行き

「王様、深雪さんを守っていたありがとうございますとございます」

「フハハハハ！ 臣下である達也の妹を守るなど容易いことよ！ それと穂波よ、最高の茶を出せ。くだらない茶を出せばわかっておるな？」

「畏まりました。」

と桜井さんはお茶を淹れにいった。

でもあの人は私では無くて兄を守ろうとしていた。私の事など、どうでもよかつたの  
ではと思つた。

## 追憶編

## #2

「はあ…」

思わずため息が漏れる。何故なら黒羽貢さんからパーティーの招待状が届いたからだ。今晚くらいはゆっくりしたかったのに…。

「深雪さん、用意は出来ましたか？」

と桜井さんの声がした。

「あつ、はい」

すると桜井さんは部屋の中へ入ってきた。が、かなり冴えない顔をしていた。

「どうかなさったのですか？」

「いえ… 王様が騒ぎを起こさないか心配なのです…」

確かに英雄王？である彼は前のパーティーの時に黒羽貢さんの事を雑種と言った事により騒ぎになった。原因は彼を招待しなかった事だと聞いている。彼曰く「王である我を招待しないとはどういう見だ！」と会場で言ったという… 子供かあんたは。

「私から何か言った方がいいですかね？」

と桜井さんに提案してみる。

「そうしていただけると助かります！」

桜井さんが満面の笑みを浮かべていた。そんなに喜ぶ事なのですね…

\*

私は今王様の部屋の前に来ています。

彼の部屋は特別に用意されているいわば彼専用の部屋です。ちなみに彼はお母様と同じくらい偉いらしい。ガーディアンなのに…

取り敢えず桜井さんに頼まれたためドアのノックする。

「深雪でございませす。あの、王様さんお邪魔してよろしいですか？」

「深雪か、構わんぞ。」

彼からの許し？が出たので中に入ると、なんとまあお母様の部屋より設備がよろしいことで

「それで、我に何か用か？」

「あの、今日のパーティーなのですが、騒ぎに起こさないようにして欲しいのですが」と言ってみた、色々言われるだろなあ…、

「フム、久々の深雪からの頼みか。仕方あるまい、騒ぎを起こさぬように我なりに善処しようではないか」

と普通に承諾された。断られると思ったのに。

「意外だな、と思つておるな？ 我の王の器をなんだと思つておる？」

「いえ、その…。」

「まあよい、他に用が無ければさつきと立ち去るがよい。」

と言われ素直に部屋から出た。

まあ桜井さんもこれで楽になるでしょうに。相変わらず冷たい対応ですけど。

\*\*\*

パーティー会場

「叔父様、本日はお招きありがとうございます」

私は頭を下げて型通りの挨拶をした。

「よく来てくれたね、深雪ちゃん。お母様は大丈夫かい？」

「お氣遣い、恐れ入ります。少し疲れが出ていますが、本日は大事を取ら

せていただきました。」

「それを聞いて私も一安心だよ。おっと、こんなところで立ち話もなんだな。さき、奥へどうぞ。亜夜子も文弥も、深雪ちゃんと会うのを楽しみにしていたんだよ」

奥へ連れていかれ黒羽親子の相手をしていた。そこへ

「深雪！ 王である我を置いて先にいくとはどういう見だ！」

彼が乱入してきた…

「王様!!」

と言い黒羽双子は彼の元へ向かった

「ほう、我が臣下の亜矢子と文弥ではないか」

兄の他にも臣下はいるのね…

二人は彼と物凄く楽しくそうに話していた。私と話すよりも。

ちなみに文弥は兄を尊敬していて、将来は王様みたいな堂々とした人になりたいという。間違っても彼の様な言葉使いにならないで欲しい…

なお、叔父様は苦虫を噛み潰していらつしやった。彼と仲悪いですもんね。

叔父様は彼のもとへ向かい

「これはこれは、英雄王。来ていただき光栄でございます。」

完璧な作り笑いをしている。が、

「道化が。その様な作り笑いで我の目を誤魔化せると思っておったか?」

何言ってるんですかああ!!騒ぎを起こさないようにに言いましたのに!

「…」

叔父様が黙っている…。かなり怒っているのかな?

「消え失せよ、貴様に用はない」

そう言うのと叔父様は出ていった。

彼、一体何者なの？私のガーディアンでしたね…

\*\*\*

昨日の晩は遅くなったと言うのに私はお日様も登らない時間に目を覚ましていた。取り敢えず空気を入れ替えようと思いカーテンを開ける窓を開けた。ふと下を見ると兄と彼がいた。

トレーニングをするのだろうと思っていた。彼の後ろから剣、槍、斧等が出てくるまでは、

その武器を兄に向けて撃っていた。兄は精一杯それを避けていた。これトレーニングなのでしょうか…

「ほう、やるではないか。ならばこれならどうする？」

と兄の周りから劍槍斧が出てきて兄に向かつて撃っていた。

兄は必死に避けていたがたまに武器に当たってしまったが続けられた。

暫くするとトレーニング？が終了したのだろう、劍などが出てこなくなった。

「ここまでしておくか、あれをそこそこ避けられる様になるとはな、誉めて遣わずで達也よー。」

「ありがとうございます。」

二人は別荘の中へ戻った。

彼のあらゆるところから武具が出てくる魔法やあれを避ける兄が同じ私のガーディアンとは思えなかった。

あと兄の避ける姿を見ている際に王様から視線を感じたのは気のせいだと思いたい。

\*\*\*

私は今別荘最寄のビーチに来て兄の用意したパラソルの下の、兄が敷いたシートの上に、うつ伏せに身体を横たえていた。四時からセーリングヨットで沖に出るのだが、午前中に予定はないので桜井さんの勧めでビーチでのんびりしている。私の横には腰を下して水平線へ目を向けている兄がいる。例の彼はというと

「我は自室で寛ぐ。達也、深雪の護衛は任せたぞ。」

と言っていたため彼は自室にいる。

そのため現在兄と二人きりである。

……彼と二人きりの時は気まずいけれど、兄と二人きりの時は気まずいと思わないのは何故だろう。

まあそんなことは置いておいて兄と彼の関係が知りたいと思っていたため聞いてみる事にした。

「ちよつと、聞きたい事があるのですが」

「何ですか？」



「兄にとつて、か r : : 王様はどういう人ですか？」

兄は少し考える素振りをみせ

「もう一人の親、ですかね」

「親、ですか？」

「はい。自分勝手ではありませんが、王様は無意味な事は命令しませんし、家族というより主従関係ではありますが一人の人間として接してくれますし、

自分の悪口を言われたら王様は悪口を言った人へ怒り（脅し）にいつてくれるのです。そのため自分は王様の役に立ちたいと思えるのです。」

兄は普段私にみせない笑顔でそう言っていた。私の知っている彼と全然違う！彼はそんな人だったの？

「そう、ですか」

何故、私に対して彼は厳しいのでしょうか？それがわかるのはまだまだ先なのかもしれない。

## 追憶編

## # 3

桜井さんが手配したクルーザーは7人乗りの電動モーター付き帆走船であり、お母様と桜井さんと兄と私の4人と舵をとる人とその補助の人の2人とあと1人は…

「良い！良いではないか！クルージングとは中々良い催だ！」

と言っているのが英雄王？ことギルガメッシュさんです。彼は光の船というものを持っていてみたいなのですがこういった普通の船に乗った事は余りないらしく、私達と一緒に乗っている訳です。彼、無茶苦茶楽しそうに乗っています…

☆

クルーザーは北北西、伊江島の方向へ進路を取り、帆を抜ける風をしばらく肌で感じていて、このまま終わればよく眠れるはずだったが、肌を刺す緊張感に私は目を開けた。桜井さんは厳しい表情で沖の方を睨みつけていた。あれは潜水艦？のようなものが

「お嬢様、前へ」

私は兄から「お嬢様」と呼び掛けられ、まるで他人行儀な呼び方にやや怒りをおぼえた

「分かっています！」

私は八つ当たり気味に怒鳴ってしまった。いつもの事なのに、他人行儀な呼び方をされて悲しかったからだ。

桜井さんがCADをスタンバイしていると

「雑種如きが、誰の許しを得て我を見ている！」と彼が言い

ゲート・オブ・バビロン  
「王の財宝」

彼の後ろから朝のトレーニングで見たときより、多く剣槍斧が出現した。

すると沸き立つ泡の中から二本の黒い影がこちらへ向かって来るのが見えた。魚雷

!?!何の警告も無しに!?!

私が硬直していると

「達也、あの黒いのは任せるぞ」

「了解」

と兄は右手を海中の迫り来る黒い影へ向けて差し伸べた。

CADを持たず、何の意味があるというの?と思っていると魚雷がバラバラに分解されたからか、二本とも海の底へ沈んで行く。

…この人がやったの?何の補助具も無しに?

「よくやった我が臣下よ」

と彼が言うのと背後に出現している武具を泡の沸き立っているところに向けて発射し

た。

：… 本当に彼も何の補助具も無しに発動したというの？

数秒後、海中で爆破でもしたのだろうか、大きな衝撃と水しぶきが周りに飛び散った。

兄と王？である彼らの事を、私は何も知らない？

私は兄と彼を見詰めたまま、長椅子の上でいすくまっていた。

☆☆

国防軍の沿岸警備隊が駆けつけた時には、不審潜水艦の残骸と思われるものが浮かんでいたと言う。原因は全くわからないらしい。剣槍斧で爆発したなんて誰も信じないから当然でしょうに。それはさておき、私は彼らの事が知りたいと思ひ誰に聞いたらわかるのか考えているとドアがノックされた。

「お休みのところすみません。防衛軍の方が、お話を伺いたい、とのことですが…」

と桜井さんは躊躇いがちな声で言った。

「私にですか？」

「はい… 私と達也で訊きたい事には答えると言ったんですけど…」

「分かりました、リビングですか？」

桜井さんが頷くのを見て、着替えてからすぐに行くことを伝えた。

事情聴取に來た軍人は風間玄信大尉と名乗って潜水艦についての質疑が行われた。

桜井さんは国防軍の対応に不満を持っていた。桜井さんに睨まれた大尉さんは兄に問いを向けていた。あれ？この場に彼は居ないの？と思いき桜井さんに彼が居ないのか聞くと

「王様は朝から外出しています。行き先ですか？私にもわかりません。」

……自由人だ、と思っていると大尉さんと兄の質疑が終わり

「ご協力感謝します。」

と大尉さんは立ち上がり、敬礼しながらそう言った。

大尉さんの見送りは私と兄が出た。表の通りに車が止めてあつて、兵隊さんが二人立っていて、その内の一人が昨日の夕方に散歩道で絡んできた人だった。大尉さんは昨日の事について謝罪をし、兄は受け容れ、大尉は「都合が良ければ恩納基地に訪れてくれ。興味を持って貰えると思う」と言い残して車に乗り込んだ。

☆☆☆

バカンス三日目は朝から荒れ模様だった。そのためビーチへ出ようとは思わない。そこで琉球舞踊を観に行く事になったのだが、どうやらこの公演は女性限定らしい、そのためお母様は兄に

「達也、貴方は今日一日自由にして良いわ」と言い

「はい」

と兄が答えると

「達也よ、貴様は軍の雑種供から基地に誘われたそうではないか。我が庭に敵の侵入を許し、気づきもしなかった軍に我は興味があるぞ。なあに、少し前の我なら基地を潰すことなど容易いことよ、だが今はそんな事するほど我の器は小そうない。」

と王様が言った。基地を潰すなんて貴方は何者ですか？

「達也、英雄王もそう言っているのだから見学して来なさい。もしかしたら訓練にさんかさせてもらえるかもしれないし」

「わかりました。」

兄は無表情に受け容れた。このままでは彼らと別れてしまう。

「あの、お母様！」

気がつけば私は口が開いていた。

「わたしも、に、兄さん達と一緒にいっても良いですか？わ、わたしも軍の魔法師がどんな訓練をしているのか興味がありますし、自分のガーディアンの実力も把握したいと思いましたので・・・」

「そう、感心ね・・・ 達也、英雄王さん、聞いてのとおり、基地の見学には、深雪さんが同行します。」

「わかりました」

「… まあ、よかろう」

なんで彼は嫌がってるんですかね…

「ついでには一つ注意しておきます。人前には、深雪さんに敬語を使ってはなりません。深雪さんのことは『お嬢様』ではなく『深雪』と呼びなさい。深雪さんが四葉の次期当主だと覚えられる可能性のある言動は禁止します。」

「… 分かりました」

「それと、英雄王さんは…」

「なに、言われずともわかる。達也、基地にいる時のみ我の名を呼び捨てにすることを許そう。我の寛大な器に感謝するがよい。」

「有難き幸せです」

そんな無表情で言ってもね…

「くれぐれも勘違いをしてはなりませんよ。あくまで第三者の目を欺く為の方便です。深雪さんと貴方の関係に何らの変更もありません」

お母様のお言葉に兄は短く「肝に命じます」とだけ答えた。

## 追憶編

## # 4

お母様と英雄王？であるギルガメツシユさんによつて、私と兄と彼で風間大尉の基地を訪れていた。防衛陸軍兵器開発部の真田さんが基地を案内してくれるそうで、案内を下士官に任せなかったのは兄に期待しているからだという。

真田さんに案内されたのは天井の高い体育館だった。ビルの五階建てくらいの高さの天井から、何本もロープがぶら下がっていて、兵隊さん達が大勢、ロープを登っては天井近くから飛び降りていた。…普通なら骨折くらい当たり前の高さでしように。

兵隊さん達は五十人前後で、全員魔法師だ。例の不良兵士の松垣上等兵の姿も見える。あの人、魔法師だったのね。

風間大尉は私たちではなく、兄を待ち受けていたとそう思った。

「早速来てくれたとは、軍に興味を持ってもらっていると解釈してもいいのかな？」と風間大尉は兄に厳つい顔に不気味な笑みを浮かべて話しかけた。

「興味はあります。しかし、軍人になるかは…。」

兄は彼を見つめている。

「あの様な雑種供と共に訓練するなど、我が許さんぞ、達也よ」



相変わらず齒に衣着せない発言ですね…

風間さんは顔をしかめていた。そりや怒りますよね。

「貴方は？… それより私の部下にそのような呼び方はやめて欲しいのだが。」

と彼に向けて威圧感？をかけながら言うのだが、彼は当然その威圧にビビるらなかった

「たわけ、敵の侵入を許す軍の者を雑種と呼ばずになんと呼ぶ？」

彼は風間大尉を睨んでいた。私でもあんなに強く睨まれたことはない…

「それは… 本当にすまなかった…」

風間大尉が、怯えてる？

「… まあ良い、我の寛大な器をもってして特別に雑種呼ばわりは控えようではないか、これで満足か？道化よ」

貴方絶対許してないでしょう…

その後、私は兄が何故魔法師である事がわかったかを聞いてしまい、不審を持たれてしまったが、兄が助けてくれました。彼は焦っている私を見て大笑いしました…

でも何故、普通の兄妹のように、私のことをかばってくれたんだろう？

☆

ロープの訓練が終わり、兵隊さん達は組手の訓練になった。空手と拳法の区別もつか

ない私は退屈してしまった。

「司波くん、見ているだけではつまらないだろう？組手に参加してまないか？」

と風間大尉が兄に向けていった。

「達也よ、我もこの光景に退屈しておったところよ。貴様の格闘術が道化らに何処まで通じるか見てみたいぞ。」

と彼も兄に向けていった。彼も、退屈していましたのね…

「そうですね、せつかくですからお願ひします。」

と言うと兄は私の方をチラリと見た。もしかして、退屈していたのを、完全に見透かされた？

カーツつと顔に血がのぼる。

に、兄さんなんて、滅茶苦茶にやられてしまえばいいのよ！

と心の中で叫んでいた。だけど『兄さん』と呼び方に対する違和感を消し去れず、自分の心が、良く分からなくなっていた。

☆☆

兄の相手はもちろん大人の軍人でしたが次々と相手を余裕を持って倒していた。最後の相手であった南風原伍長と兄が握手を交わし、その周りに人垣が出来ている。風間大尉曰く南風原伍長はこの隊でも指折りの実力者らしい。風間大尉は、何か特殊な訓練

を受けているのかと尋ね、兄は稽古をつけてもらったと返し、風間大尉は深く詮索しない代わりに、もう一手お付き合ひ願ひませんかと言われていた。私は申し出をやりわりと断ろうとしたが、

「自分にやらせてください！」

と最近聞いたばかりの声に遮られた。

一歩遅かった。

「松垣上等兵、報復のつもりなら、認めることはできないぞ」

「報復ではありません、雪辱で……す」

松垣上等兵の顔色が悪くなっている。多分、いや、十中八九彼のせいだろう

「フハハハハ！誰かと思えばあの時の雑種ではないか！達也に、いや、中学生とやらに軍人が雪辱とは！貴様は道化の才能があるぞ、ここをやめて道化として生きる方が良いのではないか？」

凄い。軍人にそんなこと言えるの貴方ぐらいですよ。

「達也よ、我は満足したから帰る。深雪、貴様はどうする？」

本当なら帰りたいけれど……

「私は、兄と居ます。兄の組手を見てみたいので……」

私は残ることを選択した。

「そうか。達也よ、深雪を任せただぞ」

「わかりました」

彼は私を見て笑うと基地を後にした。

何故私を見て笑ったのだろうか？

その後兄は松垣上等兵と相手をし、見事に兄が勝ち、途中で松垣上等兵の魔法を解除した、いわゆる術式解体を発動させた事について聞かれ、CADについても軍人さん達と兄が話しているのを私はずっと見ていた。

「ところで、一緒に居た金髪の人は誰かね？」

金髪っていうとおそらく彼のことだろう

「あの人ですか・・・申し訳ありませんが回答を拒否します。」

「それは何故かね？」

「この人に名前を教えるな、と彼に言われましたので」

「そうか、ならば彼は魔法師なのかね？」

「魔術師の真似ごとはしたことがあるとは言っていますが、魔法師ではないと本人は言っています。」

「ほう。しかしあの様な言動はなんだ？立派な魔法師ならともかく魔法師でない彼は我々にキツくはないかね？」

「言動がキツイ理由は彼より弱いからでしょう。」

「… 我々が弱いのか？」

「彼が強すぎると言うのもあります。自分でも勝てる気がしません。」

「… 彼は何者なのかね？」

「自分の師匠であり家族です。」

「そうか。」

二人はまた違う会話をはじめた。

## 追憶編

## # 5

二週間のバカンスもあと7日間となり残り半分となった。最近は兄の事で悩むことが多くなり、昨日、一昨日と

私は相変わらず、あの人を振り回してばかりいた。英雄王？である彼は振り回される達也を見て笑っていたけれど。

兄を振り回している自分が情けなく思えた。

一週間前までは、こんなことは、気にもならなかったのに。私は一体どうしてしまったのだろうか？自分の心がわからなくて、何を望んでいるのか分からない。

ですがそんな事を悩んでる場合ではなくなっていた。

何故かは、それは全ての情報機器から緊急警報が流れ出たからだ。

『西方海域より侵攻』

『宣戦布告は無し』

『潜水ミサイル艦を主兵力とする潜水艦隊による奇襲』

『現在は半浮上状態で慶良間諸島を攻撃中』

耳慣れない言葉だったが、『潜水ミサイル艦』と言う単語が引つかかった。

クルージングの最中に襲っていた潜水艦は、もしかしてこの前触れだった？

「便宜を図っていたただけるよう真夜様にご依頼します！」

「ええ、お願い」

桜井さんが焦りを隠せない口調で提案して、お母様も緊張感気味で承諾していた。

「それと、王様に連絡は……」

「一応しておきましょう。彼なら大丈夫だと思っけど」

彼は私が朝食を取る前には朝食を食べ終わっており、外へ出かけていた。

：  
と云うより敵が攻めて来ているのに彼なら大丈夫って、どういうことですかお母様。

桜井さんが彼に連絡をしようとすると

私の通信端末が鳴った。よく見ると何件も彼から連絡が来ていた。

「も、もしもし？」

『出るのが遅いぞ深雪よ！我を待たせるとはどういう了見だ！……まあよい、深夜に伝えよ、軍の雑種供が基地のシエルターとやらに避難しないかと言われたのだ』

「！」

私は直ぐにお母様に声をかけた。

「お母様、王様が基地のシエルターに避難しないかって……」

直後、桜井さんが受話器をお母様に差し出し

「真夜様からお電話です」

それを聞き、お母様は受話器を取った。

「もしもし、真夜?…ええ、私よ…そう、貴女が手を回してくれたのね…でもかえって危険ではなくて?…そうね…わかりました。ありがとう」

お母様は通話を終えて桜井さんに差し出す。

「奥様。真夜様は、何と?」

「国防軍のシエルターにかくまってもらえる様、話を通したそうよ」

「しかし、かえって危ないのでは?」

「私もそう言ったのだけれど、明確な敵対状態ですらなかったのに、いきなり奇襲をかけて来るような相手に、ルールの遵守は期待出来ないそうよ」

「それは…そうかもしれないが…」

「大した労力じゃないとはいえ骨を折ってもらったんだし、真夜の言う通りに見してみよう」

「それと深雪、彼にシエルターに避難すると連絡しなさい。」

「わ、わかりました」

私は彼にシエルターに避難する事を連絡した



『そうか、では軍の雑種供にそう伝えておこう。シエルターとやらで落ち合おうではないか』

と彼からの連絡が切れ、私達は、車で迎えに来てくれた松垣上等兵にシエルターまで送ってもらった。

☆

国防軍の連絡車両に乗った私達は、検問に止められる事もなく、無事に基地へ到着した。意外だったのは、基地に避難している民間人が私たちだけでなかったこと。100人近く人が逃げ込んでいる様にも見えた。：。あれ？彼が見つからない。100人、いや、一万人の人混みの中でも彼を見つけれれる自信があるというのに見つけれないのは何故だろう。居ないからかな？

それはさておき、敵が攻めて来ているのに、基地の中へこんなに大勢で、無関係で役に立たない人間を集めて大丈夫なのかしら？

もしかして、私も戦わなければならなくなるかもしれない。

私達は魔法師、国では兵器という扱いにされる。彼は：。：。どうなんだろう？  
なので人を殺さなければ自分が殺されてしまう立場になるのでは？

と思いい悩んでいると、

「大丈夫だよ、深雪。俺がついている」

……それ、反則……!!

どんな顔していいか分からず、今どんな顔しているか分からない。いきなりそんな事を言われるなんて! いや、彼の事を考えよう! 彼が私に向かって『フハハハハハ、何だそのザマは。貴様、道化の才能があるのではないか?』とバカにされていた時を思い出すのよ! そうすれば心は落ち着くはず!

と一人で奮闘していると兄と桜井さんが急に立ち上がった。

「達也君、これは……」

「銃声ですね。それも拳銃ではなく、フルオートのもの、おそらくアサルトライフルです」

「状況は分かる?」

「いえ、ここからでは、それにこの部屋の壁には、魔法を阻害する効果があるようです。部屋の中で魔法を使う分には問題無いようですが。」

この二人の会話が分からない。すると

「おい、き、君たちは魔法師なのか」

と不意に、少し離れて座っていた男の人が声を掛けてきた。

「そうですか?」

「だったら、何が起こっているのか見てきたまえ」

何言ってるのこの人は? 使用人扱いの物言いじゃない。

「私達は基地の関係者ではありませんが」

「それがどうしたというのだ。君たちは魔法師なのだろう？ならば人間に奉仕するのは当然の義務ではないか」

「こ、こんな人を平気で口にする人がいるなんて…彼がいれば『黙れ雑種』と言つて黙れさせれるのに、なんでこんな時に居ないのですかね…」

殺気といえるオーラを桜井さんが出している。が、お母様は

「達也、外の様子を見て来て」

兄は珍しく、難色を示した。

「しかし状況が分からぬ以上、この場に危害が及ぶ可能性を無視できません。今の自分の技能では、離れた場所から深雪を護ることは」

「深雪？」

兄の反論を、お母様は冷たい声で遮った。

「達也、身分を弁えなさい」

口調だけは優しく、ゾクツと背筋が震えるような声音。

「……失礼しました」

兄は一言謝罪して、反論をしなかった。本当なら兄を弁護しなくてはならないのに…

「… 達也君、この場は私が引き受けます」

桜井さんが横から口を挿んだ。

「わかりました。様子を見て来ます」

兄はお母様の横顔に一礼して、部屋を出た。

## 追憶編

## #6

兄が外へ様子を見に行き、銃撃の音は、今や私の耳でも聞き取れるほど近づいており、この部屋にいくつもの足音が近づいている音も聞こえ、扉の前で止まった。桜井さんが私とお母様の前に立った。

「失礼します！空挺第二中隊の金城一等兵であります。」

基地の4人の兵隊さんが迎えに来たようだ。

「皆さんを地下シェルターにご案内します。ついて来てください。」

ついていってしまうと兄とはぐれてしまう。まだ英雄王？である彼とも合流できていない。なんとかしてそう言わないと思っていると

「すみません。連れが一人、外の様子を見にいつておりました、それともう一人合流する人がまだ来ていませんので」

私が言う前に、桜井さんがそう告げてくれた。

「しかし既に敵の一部が基地の奥深くに侵入しております。ここに居るのは危険です。」  
「では、あちらの方だけ先にお連れくださいいな」

そう言ったのはお母様であった。

「息子を見捨てて行くわけには参りませんので」

私は桜井さんと、無言で目を見合わせた。確かに、どうしても違和感が拭い去れない。「しかし…」

「キミ、金城君と言ったか。あちらはああ仰っているのだから、私達だけでも先に案内したまえ。」

さつき話した男性に詰め寄られて、四人の兵隊さんたちは険しい表情で顔を見合わせ小言で相談し始めた。

「…王様はともかく達也君でしたら、風間大尉に頼めば合流するのは難しくないと思うのですが？」

「別に、達也の事を心配しているのではないわ。あれは建前よ。」

私はガクガクと震え出した膝に、必死で力を込めていた。何故、実の息子であるあの人に対して、そこまで冷淡になれるの…？

「では？」

「勘よ」

「勘ですか？」

「ええ。この人たちを信用すべきでないという直感ね。彼が居たら確信をもてるのだけど…」

彼、というのは恐らく王様のことだろう。お母様の直感と、王様の人を判断する目の洞察力は本当に凄い。

桜井さんが最高度の緊張感を取り戻すと、金城一等兵さんが戻って来た。

「申し訳ありませんが、やはりこの部屋に皆さんを残しておくわけには参りません。お連れの方は責任を持って我々がご案内しますので、ご一緒について来てください。」  
言い終わった直後、別の人が入ってきて

「ディック！」

と松垣上等兵が言うと、金城一等兵はいきなり発砲した。

桜井さんが起動式を展開したが、キャスト・ジャミングによって魔法式の構築を妨害する。こちらではお母様が胸を抑えて蹲っている！

まずい…

「ディック！アル！マーク！ベン！何故、軍を裏切った！」

「ジョー、お前こそ何故、日本に義理立てする！」

「狂ったか、ディック！日本は俺たちの祖国じゃないか！」

「日本が俺たちをどう扱った！軍に志願して、日本の為に働いても、結局俺たちは『レフト・ブラッド』じゃないか！俺たちはいつまで経つても余所者扱いだ！」

「違う！それは思い込みだ、ディック！軍や部隊や上官も同僚も皆、仲間として受け容れ

てくれている！」

今の話で大体何が起こったかどうか把握できた。すると、銃撃が止み、キャスト・ジャミングのサイオン波が弱まった。チャンスと思つた私はアンテナイトを使用している奴に、精神凍結魔法「コキュートス」を発動した。

キャスト・ジャミングが止んだ。これで人間を止めてしまったのは、三人目。だが、他の相手が私に銃口を向けているのに、今更気づいた。引き金を引かれ、マシンガンの一掃で、身体に穴を穿つだろう。私は死を覚悟した……

銃を持っている人たちが引き金を引き、お母様と桜井さんが、血を流して倒れかける時に、銃を持つている相手の腕の真横で空間の歪みが発生していた。それも見たことのある空間の歪みが。

「雑種如きが！誰の許しを得て、我の深雪に手を出している!!」

彼の声だ。しかも、今まで私が聞いてきた声の中でダントツに大きい声で。更に、

「深雪っ！」

兄の声も聞こえた。



直後、その空間の歪みから剣が出現し、私に銃口を向けている人たちの腕を貫通し、肘から先が見事に切られていた。

痛みに耐えきれず彼らは、かなり大きな声で叫んでいた。

そんな声の中で

「貴様らは私のモノを傷つけようと、いや、私の宝を潰そうとしたのだ。この罪は死をもつて償え。」

彼から、いや、王様の背後に空間の歪みが発生し剣を取り出すと

「達也、そう慌てるでない。貴様の宝は無事だ。貴様は深雪のもとへ行くがよい。我はこの雑種らに罪を償いさせる。」

「はい。」

兄は王様の言うとおりにし私のもとへきて

「深雪、大丈夫か？」

と心配そうな兄の顔をしていた。

「お兄様……」

すんなりとそのことばは、私の唇を通過した。

「良かった……っ！」

私はこれが当たり前なのだと、お兄様の腕の中がわたしの居るべき場所なのだと、そ

う感じていた。

お兄様は桜井さんに向けてCADの引き金を引くと、銃で撃たれた傷が消えた。床に飛び散った血の跡が消えた。

撃たれた事がなかった事にされている？

☆

同じようにお母様も蘇生をし、桜井さんは「信じられない」という面持ちで、自分の身体を見下ろしている。なお、王様による罪人の裁きの時、兄は王様の命令によって私の目を塞いでいた。

裁きが終わった後、兄は風間大尉と向かい合っていた。

「すまない。反逆者を出してしまったことは、完全にこちらの落ち度だ。何をしても罪滅ぼしにはならないだろうが、望むことがあるならば何なりと言ってくれ。でき得る限りの便宜を図らせてもらう」

「ではまず、正確な状況を教えてください：：敵は大亜連合ですか？」

「確証はないが、おそらくまちがいないだろう」

「敵を水際で食い止めているというのは、嘘ですよね？」

「そうだ、名護市北西の海岸に、敵の潜水揚陸部隊が既に上陸しており、慶良間諸島近海も、敵に制海権を握られて、那覇から名護に掛けて、敵と内通したゲリラの活動で所々

において兵員移動の妨害を受けていた。」

… 想像以上に酷い状態だった。

「では次に、母と妹と桜井さんを安全な場所に保護してください。できれば、シエルターよりも安全度の高い場所に」

「… 防空司令室に保護しよう。あそこの装甲は、シエルターの二倍の強度をもつ」

… 呆れた。民間人が避難するシエルターよりも守りが堅いなんて。

「では最後に、アーマースーツと歩兵装備一式を貸してください。しかし、消耗品はお返しできませんが」

「… 何故だ？」

この要求には、私も疑問を禁じ得なかったが、

「フハハハハハ！ 貴様、さては深雪を手に掛けた罪を償わせるのだな？」

と答えたのは王様だ。

「はい、その通りです。」

「そうか！ そうか！ ならば臣下を見守るのも王の勤めよ、特別に付いて行ってやろうではないか！ … おい道化！ すぐに達也の言った物を用意せよ。」

「… わかった。では、君たちを我々の戦列に加えよう。」

「戯け、達也はともかく我は貴様ら道化らの指示には従わんぞ。」

「自分も軍の指揮に従うつもりはありません。ですが、侵攻軍という敵が同じで、殲滅という目的が同じであるなら、肩を並べて戦いましょう」

「……わかった。真田、アーマースーツと白兵戦装備をお貸ししろ！空挺隊は十分後に  
出撃する！」

☆☆

お兄様と王様が戦場へ向かわれ、私たちは防空司令室に避難した。

そこで、お兄様について説明してくれた。『分解』と『再生』の二種類の魔法しか使えないこと。人造魔法師計画により、感情が欠落してしまったこと。でも『兄妹愛』だけが、唯一残された感情であること。

お兄様のことを聞かなければ良かったと思うと同時に、聞いておいて良かったと考える自分がいた。

でももう一つ気になっていた事がある。

「お母様、王様についても教えていただけますか？」

そう、王様のことだ。彼は一応私のガーディアンであるが、言動や性格からしてガーディアンには全く向かないはず。なのに私のガーディアンであるのは何故なのだろうか？

「……そうねえ。彼の許しはないけれどこの際だし言うわね。」



を外した。

が、王様は軍の指示に従う事もなく、白旗を揚げていた侵攻軍を一瞬で殺した。風間大尉も含め彼に虐殺したことに抗議しようとしたが、

「敵の雑種なんで、何人殺そうが変わらんだろう」

と彼が言うのと恐れれたのか抗議しようとしていた者たちは静かになつた…

そんな静寂を破つたのは通信兵である。風間の許へ駆け寄り、

「敵艦隊別働隊と思われる艦影が粟国島北方より接近中！高速巡洋艦二隻、駆逐艦四隻！迎撃は間に合わず！二十分後に敵艦砲射程内と推測！至急海岸付近より退避せよとのことです！」

かなりの凶報であつた。

風間が無線のやりとりをし、終わると、

「特尉と貴方は、先に基地へ帰投したまえ」

帰投と表現しているが、これは逃げろという意味だ。

「敵艦の正確な位置はわかりますか？」

達也は風間の指示に頷くかわりに、そう質問した。

「それは分かるが…真田！」

何故だ、とは、問わなかつた。その代わり、戦術情報ターミナルを背負っている部下

の名を呼んだ。

「海上レーダーとリンクしました。特尉こバイザーに転送しますか？」

「その前に、先日見せていただいた射程伸長術式組込型の武装デバイスを至急持つて来ていただけませんか？」

届きますが、という真田のセリフをぶった切って、少年らしい性急さでそうリクエストした。

☆☆☆☆

達也は敵艦を破壊する手段がある事を言い、部隊には見られたくない。ため部隊を撤退させたる事を要望した。しかし、風間と真田とギルガメッシュは立ち合わせる事になった。

武装デバイスの準備を終えた達也に猶予時間を告げ

「敵艦はほぼ真西の方角三十キロを航行中……届くのかい？」

と真田は尋ねる。

「試してみるしかありません」

と達也は返し、武装デバイスを仰角四十五度に構えた。

銃口の先にパイプ状の仮装領域が展開された。通り抜ける物体の速度を加速する仮想領域魔法。仮想領域の作成に時間がかかっているものの、構築された仮想領域のサイズ

に、真田は満足して頷いていた。

だが、達也は物体加速の魔法領域のその先に、もう一つの仮装領域が発生した。

「信じられん事をする少年だな…:」

真田の呟きは狙撃銃の発射音にかき消された。見えるはずのない超音速の弾丸を、目で追いかけるようにして沖を見つめる達也。

やがて彼は、落胆したように首を振った。

「どうやら、届かなかったようだな」

王様が代弁する。

「敵艦が二十キロメートル以内に接近するのを待つしかありません。」

「それでは、敵の射程内に入ってしまう！」

「分かっています。なので基地に戻ってください。ここは自分だけでは… 不十分です

ね。王様、残っていただけですか？」

「フハハハハ。なに、貴様に言われねずとも残っておる」

「バカな事を言うな！ 君も戻るんだ」

「ここは最後に敵と交戦した地点であり、敵がここを攻撃してくるのは、ほぼ確実にである。

「口を慎め雑種。達也がやると言ったのだ。口出しするでない」



「：：　　そうか、では我々も残るとしよう」

「ほう。貴様らはここで死んでも良いと?」

「生死は兵士の常だ。百パーセント成功する作戦などあり得んからな。」

「ほう：：　道化にして中々言うではないか。」

風間の言葉に、ギルガメッシュは少しだけ風間を見直した。

☆☆☆☆

沖合で水柱が何回か上がる。

敵の艦砲射撃の試し打ちだろう。最早達也も風間も真田も王様も何も言わない。

達也は武装デバイスを構えた。銃弾の飛行時間と落下時間を考慮すれば敵艦の射程内だ。達也は、仮装領域魔法を発動して、続けて四回、引き金を引き、それぞれ照準誤差を補うようにして撃っている。

だが、敵は既に試射を済ませており、弾道を修正した砲撃が来た。

しかし途中から何故か合流した桜井さんによりその心配はなくなり、達也は自分の術式に専念できるようになった。自分の銃弾が敵艦隊のすぐ上空に到達したのを心眼で識ると、達也は右手を前に突き出し、西を指差し、その掌を力強く開いた。

銃弾が、エネルギーに分解された。

質量分解魔法『マテリアル・バースト』が、初めて実戦で用いられた瞬間だった。

水平線の向こうに、閃光が生じ、空を覆う雲が白く光りを反射する。日没には程遠いが、水平線が眩く輝き、爆音が轟いた。と同時に不気味な鳴動が伝わる。

「津波だ！退避！」

風間が叫ぶ。だが一人は違った。

「フハハハハ！よくやった達也よ。我に中々良いものを見してくるではないか！褒美として我の力も見してやろうではないか」

と王様は手元に鍵のような物が出現し、そこから赤い水晶が空中に走査し、それが収縮して、剣のような物が出て来た。

桜井さんは崩れ落ちていて見えてないが、他の三人は驚愕していた。その中でも達也が一番驚いていた。

【眼】を使っても、あれが何なのか全くわからないのだから。

「一掃せよ、エア！」

彼がそう言うのと剣と思われるものがまわりはじめ、剣と思われるものに暴風が発生し、津波を潰した。

「加減はしたつもりだが…」

だが、被害はそこそこあった。達也たちが衝撃に耐えられず突き飛ばされていた。だ

が、

「王様、今のは一体：。」

達也は自分が飛ばされたことより今の衝撃が気になった。

「これか？なに、私の宝具だ。これを拜める日が来るとはな、光榮に思え」

達也は宝具という物がわからないが、恐らくCADに似た何かだろうと解釈していた。風間達が起き上がり、今のは何かと尋ねようとしたら風間に無線機の着信音があった。

「はい……なに！それは本当なのか!？」

風間大尉は酷く慌てていた。

「さっきの達也君の魔法により、宣戦布告と見なしたのか、40キロ先に先程の二倍以上の量の艦隊が現れたようだ：。」

風間さんの顔が青くなっている。

「フハハハハ！そうか！ならば私の力をもう一度見よ。なあに、今度は加減を程々にしてやる。達也、道化よここから離れて見ておけ」

と彼が言うと、桜井さん含め四人は急いでここを離れ、遠くから彼を見ることになった。達也は加減を程々にするから離れることに、やや違和感を感じた。

ギルガメツシユは風間に敵艦のいる方角を聞き、言われた方角を見ていた。

『……目覚めよ、エア!』

彼は乖離剣を突き立て、乖離剣は刃の部分であろう所がまわりはじめた。

『原初を語る。元素は混ざり、固まり、万象識り成す星を生む。』

周囲の建物や軍事施設が次々と乖離剣から発生している暴風で崩壊しはじめていた。彼と乖離剣は上空へと浮かび、やがて、乖離剣から発生していた暴風は、絡み合う風圧の断層となり、擬似的な、空間断層となっていた。そのエネルギーは沖繩全土、いや、九州まで感じ取る事ができるだろう。

乖離剣を手に取り、上へ向ける。

風圧の断層も上へとそのまま移動する。

『死して拝せよ。』

『天地乖離す開闢の星!!』

乖離剣を敵艦のある方向に向ける。

風圧の断層は一気に剣の向けてる方向に向かい、風圧、暴風が勢いよく向かった。その際周辺の、海が、空が、大地が、その断層を境にして割れた。

後日談ではあるが敵艦は消滅し、大亜連合の一部の港とその港の周辺の都市が消滅したとのこと。

この日、日本に、二人の戦略級魔法師が誕生した、一人は【質量爆散<sup>マテリアル・バースト</sup>】の大黒竜也と司波達也。

もう一人は【天地乖離<sup>エヌマ</sup>す開闢<sup>エリツシユ</sup>の星】の言峰儀瑠ことギルガメツシユである。

☆☆☆☆☆

飛行機発着のアナウンスを聞きながら、私は六日前の事を思い出していた。水平線に突然生まれた、太陽よりも眩い光。光の中に消え去った敵の船。全てを裂くであろう空間の発生。

陸海空を裂いた空間の発生。

それが、世間と共有しているあの後の顛末。

私たちだけが知っているのは、お兄様と、王様が、敵を退けた英雄だということ。王様は既に英雄王でしたね。

桜井さんはあの後、帰って来ませんでした。私は泣き崩れてしまいましたが、お兄様が慰めてくれたのと、王様が、

「いつまで泣いている。桜井は貴様の泣き顔など見たくもないだろう。笑って送るのが貴様の使命であろう」

と言われ、私は泣きながら笑っていました。

「フハハハハ！泣きながら笑うとは、器用な奴よのう」

王様に笑われましたが、それはバカにされている時と違い温もりがありました。灰になっていく桜井さんを見みつめながら、私は決めたのです。

深雪は、何処へでも、何処までも、お兄様と王様についていきます。

## 入学編

## 入学編

## # 1

今日は国立魔法大学付属第一高校の入学式の日。だが、開会まで二時間あり、新入生や彼ら以上に舞い上がっている父兄の姿も、疎らである。

その入学式の講堂前に、真新しい制服に身を包んだ一組の男女が何やら言い争っていた。女子生徒には胸に八枚の花弁をデザインとしたエンブレムがあり、男子生徒にはそれがなかった。

「納得できません。何故お兄様が補欠なのですか？入試の成績だつてギルさんと並びトップだったではありませんか。魔法だつて本当なら」

「深雪！それは口にしても仕方がない事なんだ、わかっているだろ？」

「… 申し訳ございません」

「それにな、俺は楽しみなんだ。可愛い妹の晴れ姿を、このダメ兄貴に見せてくれよ」

「お兄様はダメ兄貴なんかじゃありません！… ですが、分かりました。見ていてくださいね、お兄様」

少女の姿が講堂へ消えたのを確認して、少年はため息をついた。

入学式まで時間があるため、中庭のベンチに座り、書籍サイトにアクセスしようとする、何も無いところから金髪の青年が現れた。彼の名はギルガメッシュ。彼も真新しい制服に身を包んでおり、花卉のエンブレムもある。

「相変わらず、仲の良い兄弟よな」

「英雄王、霊体化して見ていたのなら深雪の説得を手伝っていただいてもよかったですね」

「戯け、私も貴様が他の雑種共より劣っていることに納得しておらん。あのような実技テストで優劣つけるなど呆れて物も言えぬわ。まあ、あのようなテスト、我なら頂点に君臨していただろうがな」

「… 失礼ながら、何故貴方は首席では無いのですか？」

「貴様は我より深雪の答辞を聞きたいだろうか？ それにあの雑種共に語る言葉など我にはない」

「後半はともかく、確かに深雪の答辞は聞きたいですね」

「貴様はいつからそんなシスコンになったのだ…」

青年と少年はそんな会話をしていた。途中、一科生が何回か通っていたが青年が一科生からか、特に何も言われなかった。

入学式まであと三十分となった。



「新入生ですな？開場の時間ですよ？」

と頭上から声が降ってきた。

CADを左腕につけていたので声を掛けてきたのは、生徒会か委員会のメンバーだろう。

「ふむ。もうそんな時間とはな、知らせた事を褒めてつかわずで、雑種。」

相変わらず生徒会、委員会のメンバーが相手でも見下している。相手もいきなり雑種呼ばわりされて呆然としているようだ。

「えっと……あつ、申し遅れました。私は第一高校の生徒会長を務めています、七草真由美です。ななくさ、とかいて、さえぐさ、と読みます。よろしね」

最後にウインクが添えられそうな口調だった。

「ふむ。数字付きで、しかもあの道化の七草か。達也、あの道化の相手をしておけ、我は先に向かつておく」

青年は達也を置いて先に講堂に向かった。

(英雄王、いくら七草家に興味がないとはいえ、置いていくことはないでしょうに)

達也は真由美の相手をせざるを得なかった。

ギルガメッシュは講堂の中に入り、一科生と二科生がキツチリと分かれている光景を目にして呆れていた。

(呆れた雑種共よ、我からしたら全員が二科生、いや、それ以下だろうに。まあ達也と深雪は例外だがな)

暫く立ち尽くして、仕方なく前の方の席へ移動した。丁度座れる席三人分空いていたので三人分の席をを一人で座った。

(安物の椅子よなあ、家の椅子の方がまだよいぞ)

などと思つていと

「あつ、あの…二人が一緒に座れる席がないので…席を詰めていただけませんか」

ギルガメツシユは声のした方向へ視線を移すと二人の女子生徒が恐れながら立っており、周りの席を見渡すと、二人が一緒に座れる席は空いていなかった。

「ふむ、確かに貴様らが共に座れる席はないな。よかろう、この我に恐れながらも声を掛けたのだ。特別に席を詰めようではないか」

ギルガメツシユは二人が座れるように席を詰めた。

「席を詰めていただき、あ、ありがとうございます。私、光井ほのかと言います。ほら、雫も」

「北山雫…」

二人はまだ恐れていた。

「そう怯えるでない、とって食おうとせん。光井と北山か、頭の隅にでも覚えておくか」

視線を前に戻すと

「私は自己紹介した。：貴方の名前教えて」

北山から声をかけられた

「雫!？」

ほのかは慌てて雫の口を閉ざした

「何!? 我の名を知らぬだど!?! : : : まあよかろう、その勇気をたたえ教えてやる。我は英雄の中の英雄王、ギルガメツシユである!」

彼は堂々と自分の名前を言った。

「ギルガメツシユさんですか? 何処かで聞いた事あるような」

ほのかは何かを思い出そうとすると入学式が始まり、思い出すことをやめた。

☆

式が終わり、それぞれ個々にIDカードが渡された。

「ギルガメツシユは何組?」

「: : : 我はA組だが」

「そう、なら私達と同じ」

雫は躊躇いもなく対等の立場であるように話した（本人はそんなつもりではないが）事にギルガメツシユは興味を持ち、あまり不敬とは思わなかった。

なおほのかは、落ち着きがなくあわあわとしていた。

「そうか：： 光井の奴は何をしておる」

「おそろく司波さんのこと」

ギルガメツシユは人集りが出来ている方を見ると、深雪の姿があつた。だが、人集りのせいで動けない状態だった。

「仕方あるまい。深雪を助けてやるか」

ギルガメツシユは人集りの一番外側に寄り

「深雪よ!!いつまでこの我を待たせるか!!」

ギルガメツシユはそう叫び、人集りは彼を見た。彼と初対面の人だとかかなり怒っている表情に見える。そのため人集りは自然と彼を避けるようになり、道が出来ていた。その道を歩き、深雪のいる所まで歩いた。

だが、そこには深雪と朝に出会った人がいた。

「今朝ぶりね、ギルガメツシユくん」

ウインクしながらそう言ったのはその人は七草真由美であつた。

「あの時の道化か。貴様に用はない。疾く失せろ」

あまりにも冷たい対応に真由美は硬直した。

「深雪よ、貴様の兄が待っているだろう。さっさとゆくぞ。」

「は、はい。ですが、七草会長は兄にも用があるみたいなので、一緒に付いてきても良いですか?」

「… まあよかろう、道化よ、ついてこい」

彼の後ろに深雪と七草会長とその付き添いであろう一科生の男子生徒がギルガメツシユを睨みながら付いてきた。

暫く歩くと達也達が見えてきた。

深雪は兄の元へ走りだし、

「お兄様、お待たせしました… ところで、早速クラスメイトとデートですか?」

「そんなわけないだろう。お前を待っている間、話をしていただけだって。そういう言い方は二人に対して失礼だよ?」

達也が目には軽い非難の目の色を乗せると、深雪はハツとした表情を浮かべたあと

「はじめまして、司波深雪です。私も新入生ですので、お兄様同様、よろしくお願いしますね」

「柴田美月です。こちらこそよろしくお願ひします」

「よろしく、私のことはエリカでいいわ… ところで後ろの人は?」

エリカは深雪の後ろにいつの間にか立っていた金髪の青年を指差した。

「エリカ、彼がさつき話していたギルガメツシユだよ」

と達也が答える

「我に指を差すなど不敬であるぞ。だが、貴様は達也のクラスメイトだと言ったな、よつてその不敬を許そうではないか」

明らかに見下している発言にエリカは少し苛立った。

「あんたは私が二科生だから見下してるわけ？」

「フハハハハ。そう怒るでない、愛い奴め。我は一科生や二科生だからといつて見下しはせぬ。我に認められた者以外を見下すだけよ」

「……へえ、なら私があんたに何かを認められたら見下さないのね？」

「左様、我と同等の立場ではないが、それに近い態度をとつても許そう。まあ我に認められるなどそうそう無いがな、精々励め」

「いいじゃないの。いつかあんたを認めさせてやるからね」

達也はエリカとあの英雄王が打ち解けあっている？事に驚いているが、このまま突っ立っていると通行の邪魔となることを思った。

「深雪。生徒会の用事は済んだのか？」

「大丈夫ですよ、今日は挨拶させていただけですから、詳しい話は日を改めて」

真由美は軽く会釈して講堂を出て行こうとしたが、後ろに控えていた一科生男子生徒が呼び止めた。

「しかし会長、それでは予定が…」

「予めお約束をしていたものでありませんから、別の予定があるなら、そちらを優先すべきでしょう？」

それでも食い下がる男子生徒を目で制して、達也と深雪とギルガメツシュに微笑みながら

「それでは深雪さん、今日はこれで。司波くんもギルガメツシュくんもいずれまた、ゆっくりと」

再度会釈して立ち去る真由美と、その背後に続く男子生徒が振り返り、舌打ちを打ちそうな表情で睨んだ、ギルガメツシュが睨み返すと男子生徒は一目散に逃げるように講堂から出ていった。

達也と深雪はエリカ達にティータイムの誘いを受け、行くことになり。ギルガメツシュは用があると言い、先に帰った。

ギルガメツシュが達也の家に着くとモニターを開き、連絡をする。連絡する先は四葉真夜。

「どうだった？一高は？」

「はっ。自分自身の実力を知らず、舞い上がっている雑種共が集う場所など行きたくもないわ。だが、雑種の中にもこの我が興味をもった奴もいる。退屈はせんだろう。」

「あら？意外と高評価なのね？」

「戯け、まだ軍の基地の方がよいわ…。それで？この我に何の用だ？」

「用件はもう終わったわ。貴方の一高の評価と貴方と通話することが目的だったから…。それと、入学おめでとうって深雪と達也に言っておいて」

「貴様が言えばよかろう…。まあ良い、そう伝えておこう」

ギルガメツシユは達也達が帰ってくるまで自室でくつろいだ。



## 入学編 #2

現代社会では渋滞や満員電車という言葉は死語となっており、交通管制システムでコントロールされているキャビネットが主流となっている。

達也と深雪は達也の朝の鍛錬を終え、二人乗りのキャビネットを使って学校へと向かい、ギルガメッシュは二人が朝の鍛錬へ向かって少ししてから【GILGIL MAC HINE】という名のバイクに乗って学校へと向かった。

「お兄様、実は昨日の晩、あの人達から電話がありました……あの人たちも、娘の入学祝いに話題を選ぶくらいの分別はあったようですが、それで……お兄様には、やはり……？」

「ああ、そういうことか、いつも通りだよ」

「そうですか……結局、お兄様にはメール一本も無しですか……あの人たちは、あの……」  
「落ち着けて。親父の会社の仕事を手伝うはずだったのを、英雄王が『命が惜しくば、達也を進学させよ。』と脅てくれたおかげで、親父を無視して進学出来たんだ。祝いを寄せせるはずもない。親父の性格はお前も知っているだろう？」

「しかし、叔母にお断りをするのが筋というものですのに、その度胸もない性格に腹が立

つんです。そもそも十五歳の少年が高校に進学するのは当たり前ではありませんか」

「共通義務教育ではないのだから、当たり前でもないさ。英雄王を無視して、俺を利用するとうなるかは向こうもわかっているはずだ。それに一人前と認めているから利用しようとするんだろ。当てにされていたんだと思えば腹も立たんよ」

「お兄様がそう仰るのであれば……」

深雪が頷くのを見て、達也は胸を撫で下ろした。

なお達也は改めてギルガメッシュの存在がどれだけ有難い事かを実感した。今住んでいる家もギルガメッシュが達也と深雪の入学祝いとして購入したものであり、魔法の制御、勉強も彼から教わり、CADを作る時も彼の興が乗ったら手伝ってくれる。

ちなみに、達也と深雪の親である司波小百合と司波龍郎の最大の敵（障害）はギルガメッシュである。彼がいると彼の許しなく達也を利用出来ないのはもちろん、達也や深雪に干渉し過ぎると、彼の制裁を受けてしまうため下手に動くことが出来ないからである。

☆

「ふむ、少し早かったな」

ギルガメッシュは久々にあのバイクに乗ったため速度を上げてしまい、達也たちより早く学校に着いてしまった。校門で待とうとしたが朝の鍛錬があると聞かされたので

遅くなると判断し、二人を待たず先に教室へ向かうことにした。

教室に入ると女子生徒が少し騒ぎ出し、男子は嫉妬しているような目でギルガメツシユを見ていた。

だが、ギルガメツシユは雑種以下の生物の視線など気にもとめなかった。

「さて、私の座る場所は何処だ?…ふむ、あの奥か」

ギルガメツシユは珍しく勝手に決められた席へと向かう。その席は雫の隣だった。

「…貴様の隣とはな」

「雫って呼んで」

「戯け、貴様の願いなど我を認めさせてからでなければ聞かん」

「認めるって、何を?」

「ふむ…魔法だな。魔法で我を認めさせよ。見たところ、貴様は勉強だと我を越せそ

うにもないからな。フハハハハ」

「む…見た目で判断するのは良くない」

「ほう?筆記試験首席の我と張り合うのか?」

「…魔法で認めさせる」

「そうか…いつまで我に怯えておるのだ光井。我がそんなに恐ろしいのか?」

「だ、だって、雫が、た、タメ口で貴方に話しかけていますから…」

「はっ、そんなことか。確かに普段ならそのような口は許さぬが……喜べ。貴様らは特別だ。その不敬、許そうではないか」

「あ、ありがとうございます?」

ほのかはやや戸惑いながらも感謝の言葉を言った。自分が認めたか特別な人以外だとタメ口を許さない彼がイレギュラー過ぎて戸惑っていたのだ。

暫くすると、教室が騒ぎはじめた。原因は総代の司波深雪が教室に入ってきたからだ。

深雪は端末で自分の席を確認した後、辺りを見渡し、ギルガメッシュを見つけると彼に駆け足で駆け寄った。

「ギルさん! 何故校門で待っていてくれなかったのですか!」

「なに、朝の鍛錬があると達也が言っていたのを思い出してな、遅くなると思い先に行つたまですよ」

「そうですか。それで私を待たずにクラスメイトと仲良く……ええ!? あのギルさんがクラスメイトと仲良くしているんなんで!」

「深雪よ、我を何だと思つておる。それにこやつらは昨日話した北山と光井だ。我は他の雑種共には声すら掛けぬ」

「そういえばそうでしたね。貴方は興味のない人と不敬な人には基本追い払うか無視し

ますもんね。あつ申し遅れました。司波深雪です。よろしくお願ひしますね」

「み、光井です！光井ほのかです！こ、こちらこそよろしくお願ひします！」

「北山雫。こちらこそ、よろしく」

深雪はほのかと雫と仲良く談笑し、専門授業の見学はギルガメツシユ含む四人で行動し、男子は深雪と行動している男子生徒に嫉妬していたが、ギルガメツシユはそんなことは全く気にしていなかった。

この後、昼休みになり学食でちよつとした騒動があつたのだが、ギルガメツシユは「あの安飯など、食わん」と言い学食に行つていなかったので、この騒ぎを知らない。

☆☆

放課後となり、深雪は兄である達也と一緒に帰ろうとしたが、深雪について来たクラスメイトが達也に難癖をつけたことが発端となり、騒ぎが起きていた。

「いい加減にして下さい！深雪さんは、お兄さんと一緒に帰ると言つているんです！何の権利があつて二人の仲を引き裂こうとするんですか」

「み、美月は何を勘違いしているのでしょうか？」

深雪は何故か、慌てていた。

「深雪……何故お前が焦る？」

「えっ？いえ、焦つてなどおりませんよ？」

「そして何故に疑問形?… それと英雄王、笑いすぎです」

渦中の兄弟が塩梅に混乱しているのを横目に、思いやりにあふれた? 雑種共はますますヒートアップしていた。

なお英雄王はずつと笑いを堪えながらこの騒ぎを傍観していた。

「僕たちは彼女に相談する事があるんだ!」

「ハン! そういうのは自活中にやれよ。ちゃんと時間が取つてあるだろうが」

彼らの勝手な言い分を、二科生の男子生徒が威勢良く笑い飛ばした。

「うるさい! ウィードごときが僕たちブルームに口出しするな!」

一科生の男子生徒が二科生の生徒のセリフに切れた。

「同じ新入生じゃないですか。あなたたちブルームが、今の時点で一体どれだけ優れているというんですか?」

「… どれだけ優れているか、知りたいなら教えてやるぞ」

「ハッ、おもしれえ! 是非とも教えてもらおうじゃねえか!」

一科生の威嚇と取れるセリフに、挑戦的な大声で応じた。

「だったら教えてやる!」

一科生の生徒が小型拳銃を模した特化型のCADの銃口が向けられた。

エリカは一科生の生徒のCADを弾き飛ばそうと、身体を動かそうとしたが、背後か

ら物凄い殺気を感じた瞬間身体が動かなくなった。

殺気のある方へ振り向くと、ギルガメッシュが一科生を睨んでいた。

エリカが動こうとしたと同時に、銃口を突きつけていた一科生が悲鳴をあげた。小型拳銃のCADは真つ二つに切られていた。

「地を這う雑種風情が、誰の許しを得て我に銃口を向けている！」

ギルガメッシュはCADの真横に歪んだ空間を発生させ、剣を出現させ、CADを切った。

「雑種、我が近くにいるというのに魔法を発動しようとしたな？ 本来から死をもって償わせるが、先程の道化は中々だった故、許そうではないか。だが、二度目はない。私の前から疾く失せろ。さもなければ貴様ら全員死ぬがよい」

ギルガメッシュはそう言うのと背後に歪んだ空間を発生させ、そこから剣斧槍が出現した。

一科生の生徒達は抵抗しないと死ぬと察したのか、CADを慌てて構えはじめた。

「そうか、我に歯向かうか。なら死ぬがよい」

ギルガメッシュが武器を発射しようとする

「止めなさい！ 自衛目的以外の魔法による対人攻撃は、犯罪行為ですよ！」

「I—AとI—Eの生徒ね。事情を聞きます。ついて来なさい」

騒ぎを聞きつけたのか、生徒会長である七草真由美と風紀委員長である渡辺摩利が駆け寄ってきた。

一科生の生徒はCADを下ろし、ギルガメッシュも歪んだ空間を消した。

ここにいる殆どが硬直している中、動いたのは達也だった。

「すみません、悪ふざけが過ぎました」

「悪ふざけ？」

「はい。森崎一門のクイツクドロウは有名ですから、後学の為に見せてもらうだけのつもりだったんですが、あんまり真に迫っていたもので、思わず手が出てしまいました。」  
「ではその後に残りの一科生が攻撃性の魔法を発動しようとしていたのはどうしてだ？」

摩利が達也に尋ねるとそれに答えたのはギルガメッシュだった。

「達也、もうよい。貴様は深雪と共に帰るがよい。我はこの道化に用がある…事情を知りたいと言ったな？よからう、この我が説明しようではないか。場所を変えよ、あの雑種共がいるところで説明しようない」

そう言うと、真由美と摩利はギルガメッシュから事情を聞く為移動する。一科生の近くを通り過ぎようとすると

「運が良かったな雑種共。昔の我なら躊躇いなく殺していたぞ」



そう告げると一科生（ほのかと雫は除く）は震え上がり一目散に逃げていった。  
☆☆☆

達也達と別れ、生徒会室で騒ぎが起きた原因をいい加減に説明した後

「それで？我々に用があるんだったな？」

そう摩利がギルガメツシュに尋ねた。

「貴様に用はない、その道化に用がある」

と七草に指をさした

「お前！会長に向かってなんて口を！」

「半蔵くん、少し黙ってて」

真由美に強く言われて半蔵くんという男子生徒は黙った。

「それで、何の用なのかしら？ギルガメツシュくん」

真由美はギルガメツシュにそう尋ねる。

その問いに彼は一言で答えた。だが、彼の一言は生徒会室にかなりの衝撃を与えることになる

「我を生徒会長に任命させよ。」